

京鹿子

平成二十八年八月一日發行
第...期

8月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その十一

青梅雨のはぐれ鴉の胡乱なる
梅雨がらす骨の髓までナルシスト
綴ぢ蓋の嵌まらぬ現梅雨の穴

大阪支部吟行・真田丸二句

夏蝶の押っ取り刀や真田山
七坂を袈裟懸けにして五月雨るる



尺蠖のいけしやあしやあとルビを打つ
九九出来ぬ死活問題青大将
配当もお零れもなき蟻の列
水鉄砲手を組むことを覚えたり
燃え尽きて蠟の一涙梅雨の月
数式の解は二つに西瓜切る
黒蜥蜴峰打ちといふ刑ひとつ
干し梅の皺の数ほど風畳む
若楓光ゲと翳埋む御土居かな

— 近 詠 —

鈴 鹿
仁

撫で牛

撫で牛の背より昏れゆく梅は実に

打水に西方よりの余り風

水無月やみづ一滴にある重さ

— 追懐 — (その二十二)

蝉の世に吸ひ込まれゆく嵯峨あるき

夏川やゆつたりいくさ話など



— 近 詠 —

和田 照海

美山泊り

美山郷の要のポスト夏に入る
夏めくや水の美山のひとしほに
田蛙に水送る夕美山
口減らし話夏炉を掻きながら
華樂庵もてなし彩の風知草



松本 鷹根

南風御堂

産土や黄金哮りの椎の花

消えかかる神社由来記梅は実に

清流に競ふきらめき遡上鮎

夏草に坐して遠嶺の名を辿る

南風御堂軒下深く湖修む

近 詠



塩貝 朱千

花大根

ぼうたんの淡紅をんな庭師に逢ふ

精いつぱい揺れて笑つて花大根

風五月ドローン捉へるドローン飛ぶ

河骨に黄の雨なみだ隠し得ず

掌になんじやもんじやよりの伝言

英華採集

憲法記念日灰汁ぬぎの水替へる

東京中島悠美子

憲法九条云々と取沙汰されている昨今。国民の祝日に制定され歳時記の季語として取り扱われているものの、作句の上での馴染みは余りない。意欲的に取り組まれたこの季語と平々凡々の生活に中に見立てた下十音の作者の独自の目線が、取り合わせの効果を十二分に挙げていると言っても過言ではないだろう。

些事まみれあれこれ手抜き春キヤベツ

大阪池永加代

毎日繰り返される雑多な出来事は、然程大事な物はなく所詮取るに足らないと言える。殆どの人が些事にまみれた日常を送っている。そこで、人は手抜きを覚える。「キヤベツ」は、本来夏の季語であるが春とすることによって明るい庶民感覚が生まれ、読み手の共感を誘うことになる。

八百の嘘にも誠七変化

守口藤浴博子

「嘘八百」という言葉に数の多さがあるが、「嘘から出たまこと」という言葉があるように、人を偽るつもりという言葉が偶然事実となることがある。掲句の「まこと」は「誠」の字が当てられていることから人間の性善説が隠れている。数字の「八」と「七」にも遊びが見られるが、季語の「七変化」をうまく使っている。



藤岡紫水
 せせらぎに揺れて入り込む新樹光
 安居果て雛僧晴れて羽根を脱ぐ
 雨を呼ぶ風の重たき桐の花
 老いて知る一首の艶や業平忌
 万緑や住めば都の大藁屋

星月夜 沼田巴字

走井の清水先づ汲む旅ごころ
 尉鷄師を敬ふに礼があり
 黒揚羽大志をもちてひるがへり
 火の鳥になりゆく予兆凌霄花
 やはらかに鯉の息する星月夜

一日 丸井巴水

梅雨傘のひと日たつぷり骨休め
 ウエストを締めて蟻ども稼ぎ出す
 ひと揺れで崩るる家に簾吊る
 しんがりの軽鳧の子にも川の風
 梅雨傘のクラゲ一団渡りきる

桜の夜 伊藤希眸
 薇げんまいのひらき切るまで親である
 赫赫と椿の朱色溶浄の岬
 いづや伊豆遠流のさくら今盛り
 釘隠し一つも無くて桜の夜
 国籍はいづこ軒端に燕の子

桜満月 北川孝子

もう一度桜満月見てねむる
 桜東風おまけの様に生きて居り
 さくらどき昼餉ひとりの塩むすび
 今もある幾許の覇氣かしは餅
 振りて切る旅の水滴夏めきし

花は葉に 直江裕子

高音が出ないたんぽぽ絮になる
 花は葉に使ひ切らないピンばかり
 知らないですめばつつじの花の後
 あやまちのやうふくらみふたつ花の冷え
 盤上の青い宇宙に一手さす



藤の花 高木晶子

花筏秘策のの字すぐ弛む
花御堂今さら平家物語
都かな左近の桜ひかへめに
一心といふ忘れ物茗荷の芽
藤の花咲かせて居士の心意気

花冷え 木戸渥子

壺中にをり桜吹雪を見ずじまひ
花冷えや膝小僧とは疹くもの
昔から荒地野菊は好きな花
業平も吉野桜にまみえしや
春昼のテレビにまたも同じ顔

姫女苑 奥田筆子

口一つの親業なりしつばくらめ
謝罪業と思へばこの世おぼるなり
しろつめぐさつながら疲れしてぬたり
非武装地ばくだんあられ花ふぶき
車窓といふのぞきからくり姫女苑

よもぎ餅 井上菜摘子

山桜はるか昔を漂流す
ふりむけば桜と小字消えてをり
被写体の笑ふ山より咳払ひ
地続きに皆居りし日のよもぎ餅
花吹雪くぐりこの世をまた歩く





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

憲法記念日灰汁ぬきの水替へる

東京 中島悠美子

嘴太鴉骨の髓まで春夕焼

のこる日のここがはじまり青き踏む

心眼を持ちたし蒨葎草の根

些事まみれあれこれ手抜き春キヤベツ

大阪 池永 加代

花は葉にいろはにはほへとささり乍ら

藤咲けば己やさしくなりぬたり

草茂るついと故郷の日の戻る

八百の嘘にも誠七変化

守 口 藤浴 博子

安気かな昇る一炷のねぢり花

倦みごころ雷の一喝梅雨寒し

ひらがなでもの想ふ日の青梅の肌

異郷にて仲麻呂となる朧月

異境にて茶の湯に遊び若葉風

疎水べり枝桜這ふ鯉のひげ

若葉風タクト振る友父となる

三月のみどり早ばや庭の芝

久びさの春をさがしに散歩かな

知らぬまに視界はみどり夏浅し

雲の峰ブルーの空にふはふはと

アリゾナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

むくむくとこぶし解けり白木蓮
山笑ふ藁葺き屋根のなかば消え
峯々の薄墨色に北の春

札 幌 野村 鞆枝

馴れし眼にこゝにもそこにも蕨摘む

老人と桜とゲートボールかな

酒 田 藤波 松山

せゝらぎの澱みに浮ぶ落椿

蕨採る妻の手元に風和む

ひらひらとランダム保身もんしろてふ

春の旅楽しい話題老人会

新緑の濃淡湖に映えゆらぐ

山奥の湯宿のまかなひ遅い春

新緑の山里に足湯老人会

母の胸眠る嬰兒花弁当

さいたま 神田 惣介

春暁や境内を掃く異人僧

外つ国の朋去る京花は葉に

春灯やせせらぎ紅く高瀬川

葉桜や子は全身に陽の匂ひ

武具飾るウルトラマンの古き疵

河鹿笛眠るかたちの定まりぬ

忙中の閑ラムネ玉放ちたし

双子ちゃん絡まりあうて花の道

夜桜や香る葎酒はゆるされよ

布川 孝子

千 葉 高野 春子

明けてゆく湖畔の一本桜かな
木々の芽や挿す芭蕉の辞世句碑
花びらの旅のはじまり風一陣

松 戸 岡山 敦子

うぐひすの遊ぶ里山父母眠る

クロワツサン香る朝の初つばめ

花見時一つ二つの悲恋あり

やはらかな邪鬼に捕まる暮春かな

精一杯青梅でぬる乾きかな

習志野 上野 紫泉

階の疵を隠せり蔦若葉

ジキタリス郷土を捨てし民に咲く

埋もれ木の野辺やたんぼば遠大河

柳絮とぶしよせんひとりの旅衣

たましひに重さあるとやしやぼん玉

まだ八つ生死のしやぼん玉飛んだ

若草やもう走らない縄電車

金子 正道

菜の花や三脚と待つ一輛車

真二つに割れぬ割り箸春愁

花散るや伊香保は雨の似合ふ街

新樹光防衛省の塔高し

災害にせめて募金や春惜しむ

空き屋より山吹もらひ部屋の間

春深しお堀の見ゆるレストラン

東 京 野中 圭子